

[B年] 聖霊降臨節第15主日(2026年8月30日)**【旧約聖書日課】ホセア書 11章1～9節**

- ¹ まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。
エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
- ² わたしが彼らを呼び出したのに
彼らはわたしから去って行き
バアルに犠牲をささげ
偶像に香をたいた。
- ³ エフライムの腕を支えて
歩くことを教えたのは、わたしだ。
しかし、わたしが彼らをいやしたことを
彼らは知らなかった。
- ⁴ わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き
彼らの顎から軛を取り去り
身をかがめて食べさせた。
- ⁵ 彼らはエジプトの地に帰ることもできず
アッシリアが彼らの王となる。
彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
- ⁶ 剣は町々で荒れ狂い、たわ言を言う者を断ち
たくらみのゆえに滅ぼす。
- ⁷ わが民はかたくなにわたしに背いている。
たとえ彼らが天に向かって叫んでも
助け起こされることは決してない。
- ⁸ ああ、エフライムよ
お前を見捨てることができようか。
イスラエルよ
お前を引き渡すことができようか。
アダムのようにお前を見捨て
ツェボイムのようにすることができようか。
わたしは激しく心を動かされ
憐れみに胸を焼かれる。
- ⁹ わたしは、もはや怒りに燃えることなく
エフライムを再び滅ぼすことはしない。
わたしは神であり、人間ではない。
お前たちのうちにあって聖なる者。
怒りをもって臨みはしない。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 12章27節～13章13節**

12 ²⁷ あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。²⁸ 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。²⁹ 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。³⁰ 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだ

ろうか。³¹ あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

13 ¹ たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。² たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。³ 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

⁴ 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵ 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。⁶ 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。⁷ すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

⁸ 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、⁹ わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。¹⁰ 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。¹¹ 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。¹² わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。¹³ それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

【福音書日課】マルコによる福音書 12章28～34節

28 彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」²⁹ イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。』³⁰ 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

³¹ 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」³² 律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない。』とおっしゃったのは、本当です。³³ そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」³⁴ イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

ホセア書11章1～9節

- ¹ まだ幼かったイスラエルを私は愛した。
私はエジプトから私の子を呼び出した。
- ² しかし、私が〔底本→彼らが〕彼らと呼んだのに
彼らは私から、〔底本→彼らの前から〕去って行き
バアルにいけにえを献げ
偶像に香をたいた。
- ³ エフライムの腕を支え
歩くことを教えたのは私だ。
しかし、私に癒されたことに
彼らは気付かなかった。
- ⁴ 私は人を結ぶ綱、愛の絆で彼らを導き
彼らの頸から轡を外す者のようになり
身をかがめて食べ物を与えた。
- ⁵ 彼がエジプトの地に帰ることはなく
アッシリアが彼らの王となる。
彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
- ⁶ 剣は町で荒れ狂い
大言壮語する者を絶ち、彼らのたくらみを挫く。
- ⁷ わが民はかたくなに私に背いている。
彼らがいと高き者に向かって叫んでも
決して届かない。
- ⁸ エフライムよ
どうしてあなたを引き渡すことができようか。
イスラエルよ
どうしてあなたを明け渡すことができようか。
どうしてアダムのようにあなたを引き渡し
ツェボイムのように扱うことができようか。
私の心は激しく揺さぶられ
憐れみで胸が熱くなる。
- ⁹ 私はもはや怒りを燃やさず
再びエフライムを滅ぼすことはない。
私は神であって、人ではない。
あなたのただ中であって聖なる者。
怒りをもって臨むことはない。

コリントの信徒への手紙一12章27節～13章13節

12 ²⁷あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です。²⁸神は、ご自身のために、教会の中でいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に癒しの賜物を持つ者、援助する者、管理する者〔直訳→舵取り〕、種々の異言を語る者などです。²⁹皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。皆が奇跡を行う者でしょうか。³⁰皆が癒しの賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。

皆がそれを解き明かすでしょうか。³¹あなたがたは、もっと大きな賜物を熱心に求めなさい。

そこで、私は、最も優れた道をあなたがたに示します。

13 ¹たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私は騒がしいどら、やかましいシンバル。²たとえ私が、預言する力を持ち、あらゆる秘義〔→神秘〕とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどの信仰を持っていても、愛がなければ、無に等しい。³また、全財産を人に分け与えても、焼かれるために〔異本→誇るために〕わが身を引き渡しても、愛がなければ、私に何の益もない。

⁴愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない〔別訳→思わない〕。⁶不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ。⁷すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

⁸愛は決して滅びません。しかし、預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れます。⁹私たちの知識は一部分であり、預言も一部分だからです。¹⁰完全なものが来たときには、部分的なものは廃れます。¹¹幼子だったとき、私は幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていました。大人になったとき、幼子のような在り方はやめました。¹²私たちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ているが、その時には、顔と顔とを合わせて見ることになります。私は、今は一部しか知りませんが、その時には、私が神に〔原本にはない補足〕はっきり知られているように、はっきり知ることになります。¹³それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残ります。その中で最も大いなるものは、愛です。

マルコによる福音書12章28～34節

²⁸彼らの議論を聞いていた律法学者の一人が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる戒めのうちで、どれが第一でしょうか。」²⁹イエスはお答えになった。「第一の戒めは、これである。『聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は、唯一の主である。』³⁰心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』³¹第二の戒めはこれである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる戒めはほかにない。」³²律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』と言われたのは、本当です。³³そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くすいけにえや供え物よりも優れています。』³⁴イエスはこの律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・8月30日「聖霊降臨節第15主日」の日課主題は「最高の道」。

・旧約日課は、「ホセア書」から、神の愛を歌う預言章句の一部。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、教会を「キリストの体」にたとえた上で「愛」の至上性をたたえる箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、最も重要な掟について論じる箇所。

旧約日課(ホセア 11 章より)

・「ホセア書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)で「後の預言者」の第四部「小預言者(十二預言者)」に含まれる預言文書。標題(1:1)によると、前8世紀の南王国ユダの四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)と北王国イスラエルの王ヤロブアムに仕えた宮廷預言者「ベエリの子ホセア」の預言句集および預言活動録として編纂されている。ホセアの仕えた南王国の四代の王は、「イザヤ書」の預言者イザヤや「ミカ書」の預言者ミカと重なるが、彼らと異なることとして、北王国ヤロブアム王に仕えたことを示す表記が標題には含まれている。本書のヘブライ語は南王国ユダ地方とは異なる北王国地方の方言で記されていると考えられており、おそらく、預言者ホセアは、当初、北王国ヤロブアム王に仕える宮廷預言者として活動を始めたが、同王崩御後の王国混乱を避けて南王国に亡命した一群の一人として同王とほぼ同時期に南王国を統治していたウジヤ王に仕えることとなった者と推認される。このことから、イザヤやミカら同時代の南王国の預言者がホセアのような亡命預言者・祭司を通して北王国地方の宗教文化の影響を受けた可能性が示唆される。

・本書は、預言者に課される象徴行為的な語りを通して、北王国イスラエルに対する裁きと立ち帰りへの呼びかけの預言、また、付随して南王国ユダに対する警告の預言が展開されている。その際、北王国の王権を意味する「サマリア」や、その中心部族を指す「エフライム」、また国家祭儀を担っていたと考えられる聖所「ベテル」やそこで語られる伝承的族長「ヤコブ」などの用語が多用されているが、主なる神への立ち帰りが呼びかけられ、回復への期待が語られるのは「エフライム」である。「エフライム」の用語は、北王国を構成する諸部族の中心として事実上「イスラエル王国」と同義的に使われているとも考えられるが、「イスラエル」が部族連合的国家の概念用語であるのに対して、「エフライム」は具体的な部族名であり、そこで生きている具体的な人々の姿やその社会が想像されるものである。

・日課箇所は、「イスラエル＝エフライム」に対する神の愛が告げられ、その回復の希望が語られる預言となっている。そこで対象とされる視座は、王国としての「イスラエル」ではなく、「エフライム」という集団社会に属する人々に向けられている。

使徒書日課(Ⅰコリント 12~13 章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。その概要については、資料「聖書と祈りの会 260722」など参照。日課箇所は、「聖霊降臨節第10主日」の使徒書日課(Ⅰコリ 12:14~26)に続く箇所。

・日課箇所は、前段(12:1~26)で展開される「賜物」論に基づく教説の延長線上にあり、殊に 13:1 以下は一連の教説を集約するものとなっている。13:1~13 には、「愛の讃歌」などとも称され、元になる讃歌の存在も推測もされてきたが、確かなことは分らない。

・前半部(12:27~31)は、12:1 から展開されてきた「賜物」論に基づく教説の帰結として語られる「キリストの体＝教会」論となっている。パウロは、一連の教説を、「霊的な賜物」(12:1)という概念を提示することで始め、これを受けた前段(12:12~26)では、その多様な「賜物」の等価値性の根拠とされる「一つの霊」が洗礼によってキリストと結ばれることによってすでに等しく与えられているという理解に基づいて、キリストによる「一つの霊」を与えられて「一つの体」とされた集団としての教会が「一体」であるべき理由を、「体」のたとえを用いた組織論(有機体国家論に類似)によって展開してきている。それゆえ、この日課箇所前半部は、具体的な教会組織論の様相を有したものとして展開されている。

・当時の「教会」で、ここに挙げられているような役職なり役務が実際に置かれたり実践されていたのであろうが、それが各地で形成されつつあった地域「教会」で組織制度として定着していたわけではないだろう。むしろ、イエス・キリストの直弟子であった「使徒」を特別視することから派生して、教会集団内で宗教的な序列関係が生じ始めていたことに対して危機感を抱いたパウロが、序列的に扱われることのある役職や役務を敢えて取り上げて、それらが「キリストの体＝教会」観の下で相互対等な関係性の中で位置づけられるべきことを説こうとしているものと解される。

・日課箇所後半(13 章)では、その相互対等な関係性を端的に表す概念として「愛」の教えが展開される。

・「愛(アガペー)」は、「パウロ書簡集」では広くすべての書簡で用いられる用語(名詞形 75 例、動詞形「アガパオー」34 例)で、パウロの教説の中でも鍵となる概念を表す。この用語は、「福音書」では、「ヨハネ」で多くの用例(名詞形 7 例、動詞形 35 例)が見られる他は、特に名詞形の用例が限られている(マタイ:名詞形 1 例、動詞形 8 例。マルコ:動詞形 1 例。ルカ:名詞形 1 例、動詞形 13 例)。「福音書」が素朴に「愛」の実践に目を向けているのに対して、「パウロ書簡」は、「愛」を概念として拡大解釈することで信仰者の行動規範を広く枠づけようとしている。

・13 節「信仰、希望、愛」の並列は、パウロの「テサロニケの信徒への手紙一」にも見いだされる(Ⅰテサ 1:3、同 5:8)。

福音書日課(マルコ 12 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中に置かれた「最も重要な掟」についての対話編。「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が同じ主旨の対話を共通して伝えているが、「マタイ」と「マルコ」がこれを「受難物語」の中に置いているのに対して、「ルカ」は旅の途上での出来事の中に配置して伝え、また対話の設定も異なるものになっている。

・日課箇所は、神殿境内で活動している際に、陥れようとした人々から論争を仕掛けられた主イエスが対話を通して教えられた一連の伝承説話(12:13~17「皇帝への税金を巡る論争」+12:18~27「復活についての問答」+日課箇所)の最後に位置する。ただし、日課箇所は、一連の議論を傍観していた一人の律法学者が、必ずしも論争を仕掛けるためではなく問いかけ、主イエスの回答に同意し、最終的に主イエスの是認を引き出す、という内容になっている。この律法学者が、前段までに登場させられていた「陥れようとした人々から遣わされた「ファリサイ派やヘロデ派の人」(12:13)あるいは「サドカイ派の人々」(12:18)の中に含まれていた者かどうかは明確ではないが、少なくとも「マルコ」は、「律法学者」という存在を一概に否定してはいないことが示されている。

・「掟」(28 節、31 節)は、ギリシア語「エントレー」の訳語であるが、『聖書協会共同訳』ではすべて「戒め」の訳語が充てられている。旧約では、ヘブライ語「ミツヴァー」の訳語に「戒め」が充てられている。「ミツヴァー」は、旧約正典中で特別頻繁に用いられるわけではないが、ユダヤ教の伝統の中では「律法」に基づく諸規範を指して最も一般的に用いられる用語で、ユダヤ教徒としての自己理解として「バル・ミツヴァー(戒めの子)」という表現を用いる。

・「第一の掟」(29 節)として主イエスが引用されたのは、「申命記」6:4~5。「第二の掟」(31 節)は、「レビ記」19:18。申 6:4「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」から始まる句は、「シエマ・イスラエル」の呼称(単に「シエマの祈り」とも言われる)で知られるユダヤ教の信仰告白祈禱文の冒頭の句。現代の敬虔なユダヤ教徒は、この祈りを安息日礼拝で唱えるほかに一日二度唱えることを「ミツヴァー」として守っているとされるが、これが広くユダヤ教との間で定着したのは、紀元 1 世紀以降と考えられている。

・律法学者が問うような「律法」を簡潔な教えに集約して表現する試みは、紀元前後のユダヤ教ラビたちの中で盛んに論じられていたとされる。そのような中で、ラビたちの一派「ヒレル派」では、主イエスがここで示されたのと同じ二つの聖句に「律法」を集約できるという考えが広く論じられていたことが知られている。おそらく、主イエスはそのような「律法」解釈を知っていてこの回答をされたのだろう。また対話した律法学者も、おそらく「ヒレル派」に属していた者だったので、完全に同意したのだろうと推察される。

来週の誕生日 (8 月 30 日~9 月 5 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-11「感謝に満ちて」(= I 2)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンカルトの作詞作曲。1630 年ごろ自らの子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自曲に用いている。
- ・21-57「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚晃が曲を付した。
- ・21-505「歩ませてください」(曲 = I 353)は、19 世紀末米国の会衆派牧師 W.グラッドンが雑誌に掲載する宗教自由詩として創作したものが原作で、その後、グラッドンの指定した曲とのセットで讃美歌集に採用され、広く歌われるようになった。この曲は、もともと「わが魂のひかり」(21-214 番)のために作曲されたもの。

21-11「感謝にみちて」**Nun danket alle Gott**

1. Nun danket alle Gott, / Mit Herzen, mund und händen, / Der große dinge thut / An uns und allen enden, / Der uns vom mutterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetzt und gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm leben, / Ein immer fröhlich's herz / Und edlen frieden geben, / Und uns in seiner gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, ehr' und preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen himmelsthron, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetzt und immerdar.

21-505「歩ませてください」**O Master, Let Me Walk with Thee**

1. O Master, let me walk with Thee / in lowly paths of service free; / tell me Thy secret; help me bear / the strain of toil, the fret of care.
2. Help me the slow of heart to move / by some clear, winning word of love; / teach me the wayward feet to stay, / and guide them in the homeward way.
3. Teach me Thy patience, still with Thee / in closer, dearer company, / in work that keeps faith sweet and strong, / in trust that triumphs over wrong.
4. In hope that sends a shining ray / far down the future's broad'ning way; / in peace that only Thou canst give, / with Thee, O Master, let me live.